

学期レポート 2012 年春学期



BOSTON
UNIVERSITY

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業

第 4 期生 武田 太一



ボストンそろそろ飽きてきた？

冬休みは日本に一時帰国し、たっぷりと充電してきた。日本にいる友人たちや、おいしい日本食をあとにして春学期が始まった。今までボストンのことを出来るだけ述べてきたが、そろそろ飽きがやってきた。マサチューセッツで育ってきた友達ですらボストンはつまらないところと言っているぐらいである。しかし、ボストンでまだ行っていないところ、体験していないところはいくつかあるため、まだボストンにいる間に訪問、体験出来たらと思っている。気候の方については、今年は異常気象と呼べるほど雪があまり降らなかったり、極端に暑くなったりと相変わらず読めない。ただし過ごしにくいというわけでもないの、そのあたりは感謝したいところである。今度はボストンならではの名所や食べ物を紹介出来るようにしておきたいものである。

学校生活の傍らで聾学校でのボランティアも継続して行ってきた。毎週金曜に聾学校幼稚部で園児たちと一緒に遊んだり、勉強したりしている。以前は年長クラスの通常クラスや重複クラスでの支援が多かったが、今年は年中クラスが中心になっている。というのも、幼稚部では男性教員やアシスタントがいないため、男性スタッフを配置することで行動障害がある園児に改善が見られるかどうか様子を見てみたいという計らいからである。果たして改善があったかどうかは週 1 のボランティアだけでは分からないので、今後も幼稚部や小学部での男性教員の重要性は気になるところである。

春学期の講義

この春学期では 5 クラスを受講した。それぞれのクラスは以下のとおりである。1 週間のスケジュール表は基本的に次のページの通りであるが、プレ実習が 5 週間のみであったため、プレ実習後はアルバイトやボランティアにあてるなど多少の変更はあった。

- DE555 Literature Skills in Deaf Children 読み書き能力と聾児
- SE534 Classroom and Behavior Management 教室と行動管理
- DE576 Advanced Language and the Deaf Child 応用言語と聾児
- DE693 American Sign Language VI アメリカ手話 6
- DE574 Pre-Practicum プレ実習

	月	火	水	木	金
7:30	7:30-1:30 プレ実習	7:30-1:30 プレ実習	9:00-2:00 研究室 アルバイト	7:30-1:30 プレ実習	8:00-2:30 TLC ボランティア
8:00					
9:00					
1:30					
2:00			2:00-5:00 DE576		
2:30	2:30-4:00 研究室 アルバイト	2:30-6:00 研究室 アルバイト			
3:00					
4:00	4:00-7:00 DE555				4:00-5:30 DE693
5:00					
5:30			5:30-7:00 DE574		
6:00		6:00-7:00 ランゲージリンク			
7:00		7:00-8:30 SE534			

DE555 Literacy Skills in Deaf Children 読み書き能力と聾児

聾児に対して書記英語をどのようにして教えていくかを学ぶ講義である。ポストン大学ではバイリンガル教育を導入しているため、アメリカ手話と英語の違いを学ぶことから始まる。聾児は手話で言語能力の基礎を培い、第二言語の英語へと繋げていくことによりバイリンガルとなる。バイリンガルになるということは、2つの言語を流暢に操ることが出来るからこそ、聾児にとっては様々な利点があるということになる。このように手話を獲得することは口話教育などに比べて、高い教育成果を得ることが出来るが、アメリカのろう学校の45%が口話教育、50%が手指英語、5%がバイリンガル教育というのが現実である。また、一部の聾児は「大きくなったら聞こえるようになるんだ」と信じている現状を見ると、一刻も早くバイリンガル教育へのシフトが必要になり、ロールモデルやカリキュラムの必要性が問われる。

聾児に限らず、一般的に私たちが言葉を覚えていくたびに頭の中にスクリプト(台本)が出来上がっていく。だから見たことがある単語や文章を見ると、その台本に既にあるものだから特に興味を示すことはない。しかし新しい単語や文章に遭遇すると、台本にないものだから興味を示すことになる。教員の役目はその新しいものをいかにうまく出せるかが重要になってくる。新しい単語があまりにも多すぎると、逆に学ぶ意欲を失ってしまうのは避けたいところである。教員がわざと間違った例を示す、手話を使わずに筆談でやり取りしてみるなど、意図的に生徒たちに考える力を身につけさせることも大事である。

アメリカ手話と英語は異なる言語であるため、混合して教えるてはならない。生徒たちに英文を読ませる時の例として、例えば黒板に英文が書かれていて、床には「英語ゾーン」「手話ゾーン」と区切られているとする。「英語ゾーン」に立っている間は手話が使えず、「手話ゾーン」に移動すれば手話が使える。一旦「英語ゾーン」で黒板に書かれている英文を読み、「手話ゾーン」に移動したら黒板を見ずに手話でその内容を他の生徒に話すという方法がある。この他にもいかにモードを切り替えさせるか工夫があるが、英語と手話を混同させないという面は日本でもぜひ活用出来たらと思う。また手話の時間／先生、英語の時間／先生は別々にした方が望ましいが、現状では先生が不足しているため1人の先生が手話と英語を兼任して教えることになることが多い。これを打破するために、手話教員採用やカリキュラムの再編成が必要になってくる。

SE534 Classroom and Behavior Management 教室と行動管理

これは特別支援教育コースの講義であり、ろう教育コースの必修講義になっている。この講義に集まった受講生たちは、理学療法士、作業療法士、小学校教育、特別支援教育教員コースなど様々な分野からなっている。教室において、問題行動がある生徒たちの行動をどのように分析し、あらゆる改善方法をこの講義を通して考えていく。

重複クラスに限らず、通常クラスでも問題行動がある生徒たちは存在する。問題行動の例として、物を投げる、手をひらひらさせる、人の話を聞かない、貧乏揺すりをする、授業中に叫ぶ、乱暴な言葉遣いなどが挙げられる。これらの行動を分析するには様々な方法があり、一定時間でその行動が何回起こるか、どういう状況でその行動が起こるかなどを記録していく。その記録を基に、望ましくない行動を減らしたりする方法を提案する。例えば問題行動がある生徒が、体育の時間に参加するのを嫌がる場合は、その前後の教科が嫌子となっている可能性がある。時間割を変更するか、あるいは体育の時間になる少し前に「もうすぐ体育の時間だよ」と伝えて体育の時間への心の準備をさせたりするなど考えられる。これは個々に合った対策が必要になってくる。そのためろう教育を含めた特別支援教育分野で働く教員は個別教育計画を立てるだけでなく、個別行動計画を立てる必要もある。学習指導案なども含めて教員に課せられる負担は大きいですが、チームを編成するなど様々な工夫のもとで運営している。

これまで重複クラスでのボランティアなどを通して重複児と接しているため、自分の経験と講義で話される具体例が重なることが多い。これまで自分が感じていた問題面を講義で議論する事ができ、今度試してみようと思う解決案をたくさん知ることが出来た。アメリカで聾学校の重複クラスで教鞭を取りたいと思うなら、多くの書類作成などの作業も伴うことを覚悟の上で決める必要があると考えさせられた講義であった。

DE576 Advanced Language and the Deaf Child 応用言語と聾児

秋学期で受講した「言語と聾児」の続きとも言えるクラスである。しかし担当教員が変わったため、秋学期とは異なる方法での講義であった。前の講義はほとんど聴講するだけに近い形であったが、この講義では議論や模擬講義練習など実践的に近いものだった。3 時間ほとんど座って聞いているだけよりも、参加型講義の方が楽しく進めやすい。

聾児は生まれた時から学齢期に達するまでの間に音声言語を自然に習得出来るため、学校の先生はそれを前提とした上で授業の準備を進める事が出来る。しかし聾児の場合は事情が異なってくる。聾児の 90-95%は聴の親の元に生まれてくるため、言語アクセスが全くないに等しい。聾児の多くは口話教育を受ける事になるが、話せるようになることや聞き取れるようになることの練習に時間を費やしてしまいがちになるため、生活や学習に必要な認知発達が進んでいけなくなる。また人工内耳の手術も推奨されるが、それもまた口話教育と同じ結果になり、聴覚活用は期待出来るものの、学習到達度は補聴器着用の子どもと比べて低下するという結果が出ている。これらの事実を基に、聾児には生後より手話による言語接触の機会を与え、コミュニケーション能力の基礎を培うとともに、認知発達への促しをしていく。第一言語である手話を習得したあとは、口話練習や書記言語習得へのステップがしやすい。そのため家族への手話指導などのサポートが望まれる。

ヴィゴツキー理論など聾児への指導に効果的な方法など講義を通して習った。教員が生徒たちに対して何らかの課題を与える時は、生徒たちの能力に応じたものであり、かつ少しだけステップアップしたものでなければならない。100%解ける課題を与えるのではなく 95%解けるものを与える事で、5%を考える／新しく学ぶようにさせる。逆に 90%などになると、生徒の方が学ぶ意欲が落ちてしまう。こういったバランスを取りながら教えていく必要がある。手話で育った聾児の場合はそれに比例して読み書き能力も高い。しかしそれでも語彙変化や文章構成など弱いところがあるため、それを補うために読書課題もうまく織り交ぜる必要がある。文章だらけの本だと理解しにくいので、イラストや図解などが充実している書籍を提供するのが望ましい。中には低学年向けの本もあるかもしれないが、高学年でも応用出来るものもあるので、適切な教材を選択出来る判断スキルが教員に求められる。

個々に対する教育は重要であるが、集団で取り組む課題も必要である。大人が子どもに介入しながら育てるよりも、子どもが子ども同士で互いにコミュニケーションし合ったりする方が成長しやすい。生徒同士で取り組む課題や活動を取り入れる事で、一人では成し遂げられないものを協力して取り組む事で、生徒のパフォーマンスを向上させる狙いもある。このように多くの実践的な事を学んだ講義であった。今後聾学校での本格的な実習が待っているのので、うまく活かす事が出来るようにしたい。

DE693 American Sign Language VI アメリカ手話 6

ボストン大学ではアメリカ手話講義が 1~6 まであり、この講義がアメリカ手話の最後の講義である。教科書は一切に使わず、教員が用意した様々な科目に対応した課題の手話表現を練習した。科目は数学、理科、歴史、地理などであった。それぞれの科目に応じた手話表現をクラスメイトたちと意見交換したり、教員に適切な表現方法を教えてもらったりなど自分の手話表現スキルを磨いてきた。週に 1 回に短い時間での講義であったため、物足りなさはあったが、今後も聾コミュニティや聾学校などを通してアメリカ手話を使っていくのは確かなので、更なる向上を意識していきたいと思う。

DE574 Pre-Practicum プレ実習

ホーレスマン聾学校(ボストン大学の近くにある聾学校)で5週間のプレ実習を受けてきた。自分が配属されたのは、中学部(6-7年生:日本で小学6年と中学1年に相当)の重複クラスで生徒5名、教員1名、アシスタント2名からなるクラスであった。主に教員のサポートをする形で実習させていただいたが、重複児となると個々の能力が異なるため、生徒と1対1で指導にあたることも度々あった。5人それぞれの特性が全く異なるため、まずはその特性を知るために観察に時間を費やした。例えばある生徒2人は他の国から移ってきたばかりで言語接触が全くなかった。アメリカ手話や英語をゼロから教えるとともに、社会スキルなども身につけさせる必要があった。アメリカ手話による会話能力は身につけてきたが、他人を尊重するなど社会スキルが身につけていないため、この場面ではこのような行動をとる(例:うっかり手が当たったときはごめんなさいと言う。)など見本を示しながら教えていく。他の生徒はアメリカ手話によるコミュニケーションよりも、特殊なコンピュータを使ってシンボルによるコミュニケーションが有利である。様々なイラスト(英語もついている)を示しながらやり取りをするのだが、そのコンピュータに示してもらいたい、示したいシンボルがなかったりすると一苦労する。このようなバリエーションに富んだクラスで、たったの5週間ではあるがいろいろ学ばせていただいた。

実習の最終日には担当教員と相談して決めた学習指導案を基に授業を行った。本来なら5人全員に教えるのが望ましいが、先述したように個々の能力が異なるため2人に絞った。アメリカ手話や英語を覚え始めてまだ1~2年しか経っていない生徒なので、周囲から見たら中学生相手に幼稚園レベルを教えているように見られるかもしれないが、これも彼らにとっては適切なレベルである。自分が教えたのは算数の物の数え方であり、例えばリンゴとバナナがあります。バナナはいくつですか。といったような問題である。自分が教えたポイントは「いくつですか/How many?」という問いが理解出来るかどうかと、様々な名詞(リンゴやバナナ)が理解出来るかどうかを焦点をあてた。またスマートボードを使った課題も作成し、生徒たちが楽しんで取り組めるようにした。面白いことにスマートボードを使った方が新しい表現や語彙などを覚えていく。このようにテクノロジーを駆使した授業も求められるので、テクノロジーをうまく使いこなせるようになるとともに、テクノロジーに頼り過ぎないようにバランスを考えながら授業を進めていくことの大切さを学んだ。

あと1年になった留学生活

ボストン大学での院生活も次の夏で3年目を迎えようとしている。本来ならこのろう教育コースは2年で修了するのだが、必須講義が他のコースに比べて多いのと(おそらくアメリカ手話とそれに関連する講義が必須になっているからであろう。)、重複児への教育のヒントを得るべく特別支援教育コースの講義も受講したため、1年延長させてもらっている。このような機会を与えてくれた日本ASL協会と日本財団に感謝しつつ、残り1年を悔いのないように過ごしていきたい。